

『シャーロット・ブロンテの生涯』

——共感と観察——

山 脇 百合子

『シャーロット・ブロンテの生涯』の特色の第一にあげられることは、女が女の伝記を書いたということである。まして当時人気の絶頂にあった女性作家、ギaskellが、やはり当時『ジェイン・エア』などで絶大な人気を浴び続けていた同じく女性作家シャーロット・ブロンテの伝記を書いたということで、世界中の読者の熱い視線をあびる宿命を担った伝記作品が誕生したのである。

結果的に考えれば、この『伝記作品』によって、ギaskellの文学的名声は一段と高まり、一流作家としての地位は固まったのである。ギaskellにとって彼女の文学歴の大きな分岐点となったのである。またシャーロットにとってはこの伝記作品が書かれたことによって、シャーロットの名声はゆるぎないものとなり、シャーロット文学に永遠不滅の生命があたえられることになったのである。

『シャーロット・ブロンテの生涯』の最大の特色はいわゆる英雄物語でなく、ひとりの極く月並な田舎牧師の娘の生涯を描いたということである。作家としてのシャーロットでなく友人として、娘として、妻としてのシャーロットの人間研究に作者の眼は終始向けられる。人間の心理を深く掘り下げた作業を行ったことでギaskellの作家としての手腕はみがきをかけられつぎに生れる傑作作品誕生に大きな影響をあたえることになった。

注目すべきことは、『シャーロット・ブロンテの生涯』において、ギaskellは自ら意識することなく、従来使われたことのなかった数々の文学的手法を創り出したことである。この伝記作品で創出された数々の技法は後に続く20世紀の作家たちに少なからぬ影響をあたえている。二、三の著しい例をあげると、作品の全ページをひとつのトーンに染め上げていることである。“Life”においては全ページは“風の音”というテーマに統一される。“Life”全篇を統一して、コントロールしているのは寂寥感の効果をあげる“風の音”である。

もの悲しい風の音は全ページを通して吹きわたり、あるときは cry、weep、weil、とさまざまに表現され音の効果を奏している。

音の効果の使用は現代の代表的女性作家ヴァージニア・ウルフに継承されている。ウルフの傑作作品『ミセス・ダロウェイ』の中で時の流れを知らせるウエストminster 寺院の鐘の音は全ページに流され、人々に起きる事件を鐘の音によって読者の心に刻みつける。ウルフの鐘の音の効果はまさしくギaskellの風の音の効果と同じものであることを認識させられる。

ウルフと同じく現代のイギリスの代表的女性作家、アイヴィ・コムプトン・バーネットにもギaskell文学の影響が明らかに見られる。

さりげない些細な表面描写によってその表面下の奥底に横たわる、目に見えない深刻な生活の様相を読者に感知させる手法は、まさにギaskellが“Life”ですでに実験済みである。

‘もの’に対し、‘人間’に対して作者の感情移入して行く巧みな技法は現代の秀逸な短篇作家、K・マンスフィールドに見事に駆使されているが、この手法もギaskellがすでに創始したものであることは明らかである。

現代のイギリスの作家の中でギaskellの影響をうけていない作家はいないとも明言している指導的立場にいる現代の評論家クレイグ博士の言葉を疑うものはいないであろう。

さて、『シャーロット・ブロンテの生涯』の中で、最も心を打つ点は何であろうか。表面はギaskellとシャーロットの世にもまれな文学者同士の友情が先づあげられるのだが、ふたりの作家の友情のかげにははげしいぶつかり合い—衝突—のあったことは『Life』の中の他のどの記述よりも読者の心に強い印象をあたえるのである。

先づシャーロットをギaskellに紹介したいというレイディ・シャトルワスの招待の手紙にギaskellはすでにシャーロットとのぶつかり合いを予感していたことが書かれている。ギaskellはつぎのようにシャトルワスへの返事を書いている。以下その手紙を引用する。

「私は誰かに何かをしてあげたと感じたことはありません。むしろ私の方が信念を求めているのです。私たちはお互いにぶつかり合ったり、自分自身

の信念を熱心に語り合ったりすることによって、お互いに力と信念をあたえ合うことができるのです…」

ギヤスケルの文学に対する信念はあくまで人間社会の一員としての人間の心理を描くことであった。ありのままの人間の様相を描くリアリスティックな方法を基調としている。

これに対してシャーロットは、リアルな人間からは完全にはなれた生きた人間世界と違う想像の世界に生きる人間を描くことであった。シャーロットは言う。

「私の文学の道は想像力を働かせた作品を書くことです。想像力こそ、私の生命、宗教ともいえるものです」

想像力のみの世界に生きたシャーロットと real な人間をそのまま描こうとしたギヤスケルとは全く異なった次元の世界を生命としていた。

ジェイン・オースティンが小さな世界を描くことを ‘her own way’ と宣言したが、シャーロットは想像力を働かせた虚構の世界を彼女の ‘her own way’ ‘とりで’ とした。人生そのものを— real な人間世界をうつし出すことを生命 (her own way) としたギヤスケルとシャーロットとは当然はげしいぶつかり合いをする運命にあったのだ。

“Life” 全篇に二人の女性作家のはげしいぶつかり合いが写し出されていることに読者は最大の関心を寄せることになる。

文学上の信念における両作家のぶつかり合いの他に、お互いに相いれない人生観の相違も “Life” の中に写し出される。

自己を犠牲にしても他者を愛するという根本的人間愛のあたたかさこそ、ギヤスケル文学の中核をなす愛の精神といえる。シャーロットには、ギヤスケルが一番大切に思っていた人間愛の欠如していたことが “Life” において鋭く攻撃されている。さりげないエピソードとして伝えられる「シャーロットのスコットランドへの旅」の話は、シャーロットの人間愛の欠如をはげしく攻撃するものである。

“Life” の終り近くに記述されているスコットランドのエピソードというのは、

シャーロットが知合いの夫婦と共に、以前から希望していたスコットランドへ旅行した折の話である。スコットランドへ着いて間もなく同行の夫婦のつれてきた赤んぼうが急に熱を出し病気になり、友人夫妻は心配のあまり旅行を中止して即日帰ってしまい、スコットランド旅行は台無しになってしまったのである。赤んぼうの病気に少しも同情をみせず、自分のたのしみがそがれた無念さをのみ嘆いたシャーロットの愛の欠如は、ギaskellの心に悲しい愛の欠如として写ったのである。この部分ほど、シャーロットの愛の欠如を悲しむギaskellの感情がはげしく写し出されている箇所は他には見当たらない。

逆に、シャーロットもギaskell向って鋭い攻撃の矢を放った手紙をあたえたことがあった。

「...ふとある考えがうかびました。あなたは、いざ作品を書こうとすると、親しい人々から自分を切りはなして、自分自身になることができますか... あなたときびしい真実との間に、光かがやく雲の光が射してくることはありませんか? ...」

自分自身になること—自分自身を支配する人間になれないのではないかという屈辱的なシャーロットの詰問状は、ギaskellの心に矢の如く突きささったであろう。ギaskellはこのはげしい質問状を“Life”に写し出し乍ら、この手紙に対する感想は何も書いていない。

シャーロットの攻撃文に対してギaskellは少しの動揺もみせていない。いささかの傷手もうけていない。この手紙のあとも二人の交際はむしろ親密さを増してきたようにみえることは驚くべき事実である。この手紙の書かれた後、1ヶ月後にシャーロットはギaskell夫人をマンチェスターに訪問し、数日滞在している。この時期にシャーロットはニコルズ氏との結婚問題が起こり、父パトリックの猛烈な反対もあり、深刻な苦悩にさいなまれていた。シャーロットの発作的感情暴露の手紙を、ギaskellは怒りよりは、むしろ同情心をもって受け入れたと思われる。その心のあたたかさに、身辺の悩みに打ちひしがれていたシャーロットは大きな救いをあたえられたことと思われる。シャーロットはギaskellに対し、母に対するような親近感を抱いたに違いないことが察しられる。

ふたりの女性作家、ギaskellとシャーロットの友情は、はげしいぶつかり合いを経験しながらお互いの信念を確かめ合い、高め合いながら真の友情へと発展して行ったのである。

ギaskellのシャーロットに対する共感（Sympathy）は共感から作家的冷徹な観察（Observation）へと移って行った。そしてその観察の営みは、ギaskellの‘人間研究’という作家精神の発展の過程の上でのギaskellにとって重要な糧となったのである。

